

News Letter

NPO 法人熊本まちなみトラスト

発行 2021-12-24 従来の広報誌から数えて 第 5 号

会員の交流と連携のために随時発行します

HPIはこちら



新型コロナウイルス感染症が中国・武漢市で発生したことが公表された 2019 年 12 月 31 日から 2 年が経ちます。昨年(2020 年)は、感染拡大第 1 波のなかで KMT 総会は書面表決となり、7 月 4 日の令和 2 年豪雨の後、8 月の感染拡大第 2 波をはさんで 7 月と 9 月に人吉にボランティア活動に出かけました。今年(2021 年)も国内での新規感染者数のピークが第 3 波(1 月)、第 4 波(5 月)、第 5 波(9 月)と次第に数を増してきました。12 月現在、小康状態を保っていますが、地球上でオミクロンという新しい変異株がまん延しており予断を許しません。

熊本まちなみトラスト(KMT)の今年 1 年を振り返りますと、5 月の総会は昨年に引き続き書面表決、運営会議は ZOOM での開催が続いていますが、今年から 2 ヶ月に 1 回となった理事会はパレアやびふれす会館 7 階に於いてリアル会議を開催してきました。理事会のない月の隔月に予定していました例会は、会員及び会員外にも参加を呼びかけ、コロナ小康状態の 7 月と 11 月の 2 回リアルで開催しました。10 月から事務局をびふれす会館 7 階に置いて試行事業を行い、複数大学学生による合同ゼミも始めました。

そのような中、理事や会員は KMT の活動のほかに、それぞれ各分野で活発に活動されています。

本号では、それらの活動の一部を紹介することで 2021 年を振り返り、新年を迎えたいと思います。

みなさまどうぞよいお年をお迎えください。



NPO 法人熊本まちなみトラスト

〒860-0078 熊本市中央区京町 1-8-24

TEL096-326-6611 FAX096-326-6612

伊藤理事 の近況

インドには 10 万人を超すチベット人難民がいます。私は国際ボランティアとして、その居留地のために水道施設やトイレの建設など、水・衛生の施設充実の支援活動のため、11 月～12 月にインドに行ってきました。



写真1 インド北部ソランの町。夕方の道路脇には野菜売りが露店を開き、かつての子飼商店街のような活気が出る。



写真2 アグラの町の歴史的建築。見事な象鼻の柱頭やヒンズー文字の浮彫がインドらしく、おそらく 19 世紀の住宅だろう。

※伊藤重剛氏は西洋建築史を専門とする学者であるとともに真言宗の僧侶でもあります。インドでのボランティア活動は氏の宗教家としての活動です。

くまにち 論壇

熊本大熊本創生推進機構准教授



田中尚人

たなか・なおと 専門は都市地域計画など。県内各地で文化的景観の保全、土木遺産の活用に関与。49歳。

コロナ禍を迎えた、熊本地震から5度目の正月。明日4日は、球磨川流域を中心に甚大な被害をもたらした7月豪雨災害からちょうど半年となる。全世界の人々が先の見えない災厄に悩まされる中、二重三重の苦境にある熊本の人々から、私たちが伝えるべきことは何だろうか。

言うまでもなく、人はたたくさんのつながりの中で生き、生かされている。しかし、災厄は大切な関係性を分断する。自然環境と生活環境、過去と未来、個人とコミュニティなど、一度失われた結びつきを取り戻すことは容易ではない。

実感するのは、人と「場」を共有する感覚の鈍りである。確かに新しい生活様式が推奨され、互いに協力してコロナ禍という非日常を乗り越えようとしてきた日々には、多くの学びがあった。一般化したテレビ電話やリモート会議は、普段は向き合えない遠方の人との対話を容易にした。それでもオンラインは、生の場

える話題も豊富だった。私が子どもの頃、テレビは一人で見るものではなく、家族や友達と一緒に話も楽しむ場であった。それが今やテレビを見ない人が増え、チャンネル争いは遠い過去となった。個別に見たい番組をオンデマンドで取りに行く時代である。インターネットが発達し、スマートフォンさえあれば、大抵の

「正解」がある問いと、定かな「正解」がない問いが入り交じる。災害後のコミュニティ再生は、他の場所の成功事例が有効なマニュアルになるとは限らない。コロナ禍の感染防止と経済活動の両立もそうだろう。災厄にあつて、間違いない正解を導き出すのは簡単ではない。正解にこだわらぬより、まずは場を

力である。対話を阻む空気が、人々の創造力を奪ってしまう。ただ、私自身がこのような考えに至ったのは、熊本地震が大きなきっかけであった。さらにコロナ禍と7月豪雨を踏まえて震災からの復興過程を振り返ると、対話による「小さな学び」から得た教訓に行き着く。それは難題に立ち向かい、対話の中から得られた「失敗から学ぶ」という視点である。

真の共有につながる対話を

を共有できない。画面を通して初対面の人と上手に話すのは難しく、偶然の出会いには望めない。

ことができる社会になりつつある。さらに地域コミュニティの弱体化や核家族化が進み、お年寄りから子どもまで一人一人が、それぞれの役割、効率性を押し付けられている。誰もが忙しく活動しなければならなくなった時代性が、共有のあり方を大きく変えている。

共有し、個々の意見や考え方に基いて対話することが肝要である。それが難局に對峙できる手だてを引き寄せ、以前この欄で触れた「成解」を導き出す。つまり、対話が自分たちなりの解を紡ぎ出すと考えるからだ。避けなければならないのは、一つの正解しか認めず、その正解に至らない対話は無意味だとする同調圧

「場」を共有した対話の欠如は災厄、特にさまざまな関係性の分断やその修復が迫られる局面においては、問題を深刻にしかねない。今こそ分断に負けない、真の共有につながる対話を深めたい。

田中尚人理事

は県下各地でまちづくりを実践していますが、2021年新春から月に一度まちづくりの本質について語りました。

「かやぶき」 現代建築に

熊本駅ビル店舗内装に活用

「循環の時代」自然素材に注目

伝統的建造物に使われてきた「かやぶき」を現代建築に活用する動きが、国内でじわりと広がっている。4月に全館オープンしたJR熊本駅ビル（熊本市西区）の大型商業施設「アミュプラザくまもと」にも、内装の一部に阿蘇のかやを取り入れた店舗が登場。最終的には土に戻る「循環型」の建築素材として、世界的な建築家も注目している。

アミュプラザ1階に、熊本らしさが表現されるベーカリー「パンできた」と話す。・オ・ルヴァン」店。カヤは枯れたススキの牧野で採取された文化財の屋根材などにカヤと八代産のイ草が使われる。阿蘇地域は幅12段にわたって交互にふかれ、柔らかな雰囲気を醸し出す。設計を手掛けた建築デザイン

人が協力。かやぶきとされないので劣化しに同じ要領でカヤとイ草を板に固定し、表面を固めて壁のように仕上げた。食品を扱う店舗のため、カヤとイ草は虫が残りやすいようしっかりと高温乾燥。かやぶきと高知県で屋根や壁に使用。7月オープン予定の蒜山高原（岡山県）の観光施設にも、地元

産のカヤを用いた。「世界的に素材の転換期を迎えており、（建築も）コンクリートや鉄から自然素材が主役の『循環の時代』が来ている」。隈氏は、3月に益城町で開かれたカヤの可能性を探るシンポジウムでこう強調した。

「まずは阿蘇・熊本から、さまざまな施設に、かやぶきを復活させ、カヤの多面的な利用を取り戻したい」と安藤氏。協会は今後、かやぶきの活用や職人の育成についての法整備を国会に働き掛けるなど、普及に向けた環境づくりを進める。（中尾有希）



アミュプラザくまもと内のベーカリー「パン・オ・ルヴァン」で内装に使われている阿蘇産のカヤと八代産のイ草 = 2日、熊本市西区



日本茅草文化協会が主催した、阿蘇の草再生とカヤの可能性を考えるシンポジウム。建築家の隈研吾氏（左から2人目）らが登壇した。3月21日、益城町

宮野桂輔理事 は近年パン屋さんの店舗設計を手がけてきましたが、アミュプラザ1階に出店した店舗では内装に阿蘇のかやを取り入れました。また、3月に開かれた日本茅草文化協会主催のシンポジウムではコーディネーターを務めました。

人吉旅館の修復 女将支えた恩人

昨年7月の記録的豪雨による災害で被災した人吉市の国登録有形文化財「人吉旅館」が、10月1日に営業を一部再開する。被災した旅館を見てぼうぜんとした女将にやる気を起こさせたのは、文化財登録を支援した女性研究者だった。



⑤修復中の人吉旅館の玄関付近
④人吉旅館の修復状況を見る研究者の磯田節子さん（右）と女将の堀尾里美さん（いずれも人吉市上青井町）

研究者・磯田さん「絶対できるから」

「女将、大丈夫よ。絶対修復できるから」

人吉旅館の女将、堀尾里美さん（63）は被災して間もなく、1本の電話を受けた。文化財登録を実現してくれた熊本高専特命客員教授の磯田節子さん（71）は建築・都市計画専攻からだった。堀尾さんは取材に、「私の頭の中が真っ白だった時に、電話の力強い声に励まされてやる気が出た」と振り返る。

1階は机や畳が折り重なり、天井から板がはずれてぶら下がっていた。泥だらけでどこから手をつけていいかわからず、絶望的な気持ちだったという。

磯田さんは電話の後、宇城市内の事務所から旅館に駆けつけた。館内は泥まみれだったが、柱や梁など建物を支える構造が無事なことを確認。修復できるこの自信を深めた。

約90年の歴史を持つ近代和風建築の人吉旅館が国の文化財に登録されたのは2013年。その約1年前に、歴史的な建物の保存などに詳しい磯田さんに堀尾さんたちから協力の要請があった。

磯田さんは教え子たちの研究の題材にさせてもらうことを条件

文化財登録時の図面活用 10月一部再開

に、無償で引き受けた。磯田さんの指導を受けながら、3人の学生が1部屋ごとに実測図面を作っていた。毎週1回訪れ、半年かけて完成。「ここでの経験をもとに教え子たちが卒業論文を書くことができ、私たちにも十分なメリットがあった」と磯田さんは話す。

磯田さんは登録申請当時の図面や写真をすべて保存していた。被災を知った時、「現地へ行って修復を手伝わなくちゃいけない。自分にはできない」と思った。被災建物などの修復に詳しい建築士など十数人とプロジェクトチームを組み、修復を始めた。

堀尾さんは磯田さんのことを「恩人」と呼ぶ。被災から1年にあたる7月の再開には間に合わなかったが、10月には玄関、ホール、厨房、大広間、浴場が使える、宿泊もできるようになる。「7割ほどまで再開できる」と磯田さん。すべて完成するのは来年5月の見通しだという。

磯田さんは、人吉旅館と並行して人吉市内の芳野旅館の国文化財登録も支援した。芳野旅館の修復も手伝っており、11月の一部再開、来年9月の全面再開をめざす。（村上伸一）

磯田節子理事 は昨年7月の令和2年豪雨の後すぐに被災した人吉市にある2つの登録文化財旅館の復旧支援に入りました。その後現在まで支援を続けています。

明治の面影 宴会場復活

肥後細川家の料理人邸宅 熊本市

熊本市中央区西阿弥陀寺町で100年以上にわたり宴会場「商工クラブ」として親しまれ、熊本地震で被災した「料理谷邸」が6月下旬、修復を終えて新たに飲食・宿泊施設などを備えた複合施設としてオープンした。



山下みきさん(左)と建物全体をプロデュースした久保貴資さん
＝熊本市中央区

肥後細川家に料理人として仕えた料理谷家の邸宅で、1887年ごろに建築。料理谷という姓も細川家からもらった。建物は木造2階建て、延べ約400平方メートルで、料理谷家が居住しながら結婚式や宴会の企画運営などを営んでいた。商業と工業に関わる人が集まる場所になってほしいと、初代熊本市長が「商工クラブ」と名付けた。25歳で結婚するまで同邸宅で暮らしていた中村静代さん(81)＝西区＝は小学生の時、商工クラブで開かれる結婚式の三九度でお酒をついでいたことを懐かしむ。「結婚式の会場と言えば、商工クラブだった」と振り返る。

熊本地震までは、山下みきさん(56)＝中央区＝の家族が住み、宴会場なども営業していたが、地震で半壊し、営業を断念した。

邸宅を維持・管理する山下さんは「修復しても維持が大変だ」と思い、最初は解体が頭をよぎった」と言っ。だが、県内外の建築家や宮大工らが「造りはしっかりしており、歴久杉の一枚



修復された商工クラブの「席貸」



商工クラブに入ったジャンルにとらわれない料理を提供する飲食店「know」



修復された商工クラブの茶室

地震で被災「商工クラブ」復旧 飲食店や宿新設

板など珍しいものも使われている。残すべきか」と何度も説得。山下さんは周囲の町屋が解体されていくことに寂しさを覚え、修復を決意した。

県の有形文化財になることを見越して、2019年に修復工事に着手。復旧には約1億7千万円かかったが、約5割は県からの補助金で賄い、明治の趣が残る「商工クラブ」が復活した。1階は焼き鳥店と、幅広いジャンルの料理を提供する飲食店が入る。地震前からあった「席貸」と呼ばれる貸しスペースや茶室も備え、2階は宿泊施設として8月にオープン予定だ。

建物全体をプロデュースした久保貴資さん(47)＝中央区＝は「清く、正しく、謎めかしく、がテーマ。見た目はもちろん、席貸しや飲食店の取り組みも珍しく、たくさんの人に興味を持って来てほしい」と話す。

山下さんは「再び、いろんな人が出会い、集える場になればうれしい。周辺地域の活性化にもつなげ、かつてのにぎわいを取り戻したい」と意気込んだ。(上野史央里)

長野聖二理事 は商工クラブの熊本地震からの復旧工事の設計を行いました。

鄭一止理事 は学生の研究発表を新市街アーケードで行いました。

210604Fri K

中心街 映画やスナックで元気に 県立大3年生 アイデア発表

県立大(熊本市東区)で開かれ、人と接するの苦手が若者が商店街の活性化策を考える発表会が2日、同大と新市街アーケードをオンラインでつ



新市街アーケードで県立大生の発表を聞く商店街の関係者ら＝熊本市中央区

環境共生学部で居住環境デザインを学ぶ3年生40人が4、5月、実際に飲食店などに足を運び、経営者から聞き取りしてアイデアをまとめた。新市街の会場には商店街の関係者ら約20人が参加。学生らは「映画鑑賞と映画音楽の路上ライブ、映画にちなんだ料理を楽しむイベント」「昼と夜で出店者が入れ替わるシェア店舗」などのアイデアを発表した。新市街商店街振興組合の安田二郎理事長(69)は「映画祭の開催や休憩場所の確保など、実現に向けて検討したい」と前向きに受け止めていた。(山口尚久)

写真右は約120年前の明治後期に建てられ、近く売却に向けて入札にかけられる三軒長屋。同左は長屋の屋根裏に渡された曲がり梁（はり）。屋根や壁ともに黒くすすけ、かつては屋内のかまどで煮炊きしていたと思われる＝熊本中央区



明治期の長屋 残して

今から120年近く前の明治後期に建てられた熊本中央区本山の三軒長屋(国有財産)が30日から、売却に向けた一般競争入札にかけられる。老朽化しているため改修が必要だが、明治期から残る長屋は全国的に珍しく、関係者らは購入者の手で保存・活用されるよう期待している。

長屋は1903(明治36)年建築と記録がある。木造平屋瓦ぶき、床面積106平方メートル(敷地面積191平方メートル)。内部は同じ間取りの3戸に仕切られ、6畳と3畳の和室、土間の台所などがある。約70年前、税金の代わりに物納されて国有財産になった。現在空き家。

九州財務局は当初、更地にして売却する方針だったが、同局国有財産管理官の古賀輝さん(39)が建物の文化的価値に着目。「長屋を残したまま売却できないか」と、熊本大学

中央区本山の国有財産 売却へ

「文化的価値」関係者ら期待

院の伊東龍一教授(日本建築史)らの協力で調査した。

その結果、一部の部材に和釘が見つかり、江戸期の建物から転用した可能性が浮上。各戸に床の間があることから、伊東教授は「(庶民向けの長屋にも)生活に彩りを添える空間のニーズがあったことを示すのでは」と注目している。

敷地が道路に接していないため更地にするると新たに建築できない事情もあるが、国有財産を文化的価値に着目して建物付きで売却するのは異例という。ただし、解体するか保存・活用するかは購入者次第。古賀さんらは「価値を生かす形で活用してもらえれば」と望みを掛けている。

一般競争入札は30日～10月14日に受け付け、開札は11月1日。最低売却価格283万円。九州財務局管財部 ☎096(353)6351。

(三國隆昌)

古賀輝理事 は国有財産となった明治後期の長屋の文化的価値に着目して、建物付で土地の競争入札を行いました。

三年坂通りに設置されたスタンドテーブルを利用する人たち
＝熊本市中央区



県立大生ら社会実験

熊本市

三年坂通り 休憩どうぞ

新たな出会いの場創出

県立大で街づくりなどを学ぶ学生らが3日、熊本市中
央区安政町の三年坂通りに、スタンドテーブルと椅子を
置いて誰でも利用できる休憩スペースを作り、新たな出
会いの場を創出しようと社会実験を実施した。

同大環境共生学部の研究室
と安政町商興会、ニューコ・
ワンが、新型コロナウイルス
の影響で減った中心繁華街の
買い物客の回復を狙って企
画。同大4年の米原睦貴さん
＝中央区＝は「三年坂通りは
歩行者天国で、バス停も近い
ため、若者の人通りが多く、
実験に適していた」と話す。

熊本地震後の仮設住宅の廃
材を活用して作ったスタンド
テーブル4個と、椅子7脚を
葛屋書店熊本三年坂の出入り
口付近の電灯などに設置し
た。「屋外で新型コロナを気

にせず、休憩できて気持ち
良い。もっと周知すれば利用
者が増えるのでは」と社員
の小川創司さん(26)＝西区。
若者らが椅子に座って休憩し
たり、テーブルでコーヒーを
飲んだりして、思い思いにく
つろいでいた。

同大4年の澤田春菜さん＝
東区＝は「テーブルと椅子を
ただ置いておくだけでは利用
者が少ない。もっと使っても
らえるように工夫したい」と
意欲を見せた。今後も月1回
開催する予定。

(上野史央里)

鄭一止理事 は学生たちと市中心部、三年坂でスタンドテーブルを使った社会実験を行いました。

荒木精之記念文化功労者 地域文化貢献の3氏

県文化協会

窪寺雄敏さん



古川保さん



養田勝彦さん



県文化協会（村上輝和会長）は20日、地域文化の振興などに貢献した県内在住者を顕彰する2021年度荒木精之記念文化功労者の3氏を発表した。

受賞者は、映画館「Denkikan」前会長の窪寺雄敏さん（83）
 熊本市中央区、1級建築士の古川保さん（74）
 同市南区、近世史研究家の養田勝彦さん（82）
 八代市。県文化懇話会世話人らの推薦を基に、6月の選考委員会を選んだ。

窪寺さんは「Denkikan」3代目。1960年代から熊本県の映画文化を盛り上げながら、熊本市中央区の新市街商店街理事長として「シネマの街づくり」に尽力。熊本を題材とした映画の制作・上映も支援した。

古川さんは古川設計室会長で職人集団「川尻六工匠」代表。新築住宅建設や古民家再生を手掛けながら、歴史的な街並みを保存する活動も続けている。熊本地震で被災した川尻

公会堂の耐震補強工事でも手腕を振るった。

養田さんは高校教諭時代から「八代古文書の会」を主宰し、八代に関係する史料を編纂。永青文庫や松井文庫、地域に残る古文書の発掘や解説を続け、多数の著書を出しながら、熊本藩の近世史研究に大きく貢献した。

荒木精之記念文化功労者は、熊本の文化振興に尽力した故荒木氏を記念して2006年に創設。これまでの顕彰者は46人。新型コロナウイルス感染症拡大のため、顕彰式の開催は未定。（魚住有佳）

会員の古川保さんは熊本地震で被災した川尻公会堂の復旧再生をはじめ、古民家改修の研究と実践、町並み保存等への貢献によって熊本県文化協会から2021年度「荒木精之賞」を受賞しました。

磯田桂史

明治期熊本の洋風建築史



熊本で花開いた 洋風建築を俯瞰する

日本における建築の一大変革期である明治期に長崎と東京の二つのルートから伝搬した洋風建築にスポットを当て、熊本におけるその伝搬状況および普及状況を詳述する。

磯田桂史理事 は公職退任後のライフワークとなった明治期熊本の歴史と建築の研究を一冊の本にまとめました。

著者紹介

磯田 桂史 (いそだ けいし)

1947年熊本県玉名市生まれ、1972年京都大学大学院修士課程（建築学専攻）修了、同年建設省入省、1998年同省退職、1999年熊本工業大学勤務、2012年崇城大学定年退職、同年熊本大学五高記念館客員教授、博士（工学）

めいじ きくまもと ようふうけんちくし
明治期熊本の洋風建築史

2022年1月31日 初版発行

著者 磯田 桂史

発行者 笹栗 俊之

発行所 一般財団法人九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34

九州大学産学官連携イノベーションプラザ305

電話 092-833-9150

URL <https://kup.or.jp>

印刷/城島印刷製 製本/篠原製本勝

© Keishi Isoda 2022

Printed in Japan ISBN 978-4-7985-0321-9